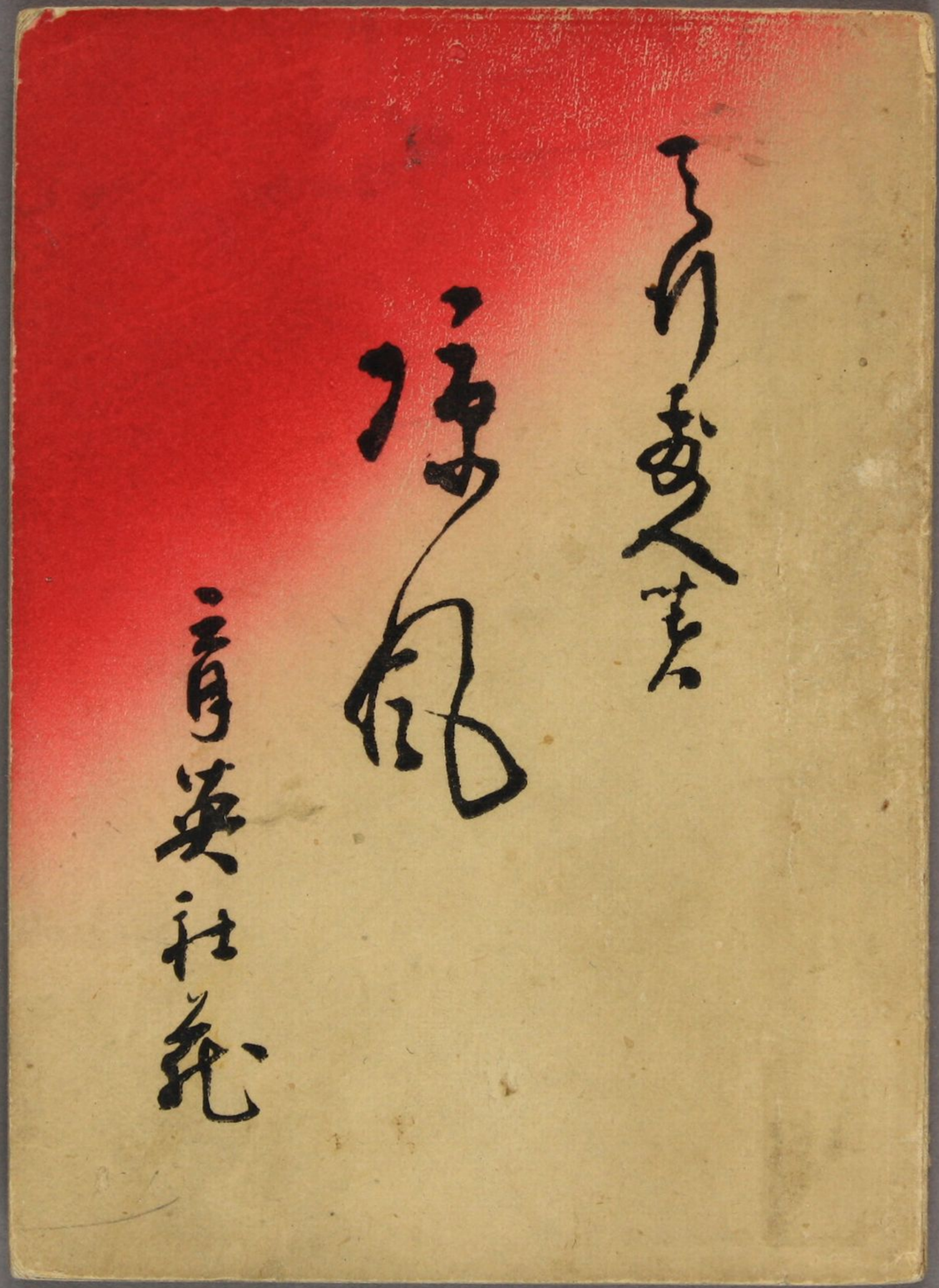
育英社

自序

紅花一枝の春過きて一陣の清風生命よりも貴き夏氣焔々たる天地と相成申候。世には愛に死ぬる人も多く有之候へとも、又夏の熱さの苦き手に弄殺せらるゝ人も多く有之候、勿論本集は幽粋と謂にあらす、清高と謂にあらす、婉麗と謂にあらされとも、書齋の淑女、繁劇場裡の紳士、徐むろに一集を繙讀し來らは、襟懐自から涼氣を臆もる者あらむか、小弟は之にて擱筆可致候。

洛陽御苑の
ほとりにて

初夏　朝比奈天行

奉湖の曙……五七
戀星……七七
心の春……八一
戀のまこと……八二
蘿……八六
木櫛……八七
露滴……八八
海原……九〇
自然……九三
金鉢山……九七
萬代橋……百七
祇園……百一二
情死……百一三
鴨川……百一四
比叡山……百一六
清水寺……百一八
音羽の瀧……百一八
白雨……百一九
螢狩……百二〇
涼風……百二〇
泉……百二一
はちす……百二三

惜別……百二六
秋の歌……百二七
なくむし……百二九
しづのを……百三〇
たきゞ……百三一
しづのめ……百三二
落葉……百三三
野菊……百三四
柳の影……百三四
不朽の祝日……百四〇

兜の夜

天

遠山寺のかねのねに
夕雲の果にかくれてぞ行く
夕日の影をうちなかむれは
かほる希望の花つほみ
開きもやらてしぼむでそ
名殘すくなく傾きて
うき世にまよふ悲運(ひうん)兒の

ちからも盡きてたへやらぬ
足のつかれを蹈みしめて
うちわはぎたる其影を
映ひてかれたる荒野の中の
尾花の上にうつしけり

うつれる影をなかむれは
あめにくちたる菅笠を
吹きやぶりもく秋風に
もつれてたれる亂髪

櫛もけづらてれくちりに
綠の色のうづもれて
ものわわれなる面影の
忍ふともなく忍はるゝ
あるに甲斐なき吾身かな

「共和」「自由」を歌ひつゝ
故郷(ふるさと)いてしそのときは
民のなやみを買んため
みなの財寶(たから)をうしなひて

玉の軒端も虫にくち
壁はやぶれて月そもる
あめつちもしけき狹莚に
心にかゝる一すじの
生命(いのち)にまさる吾妹子の
かよわき身をぞのこしおき
涙はらつて一振の
白鞘(しらさや)の太刀おさめたる
袋の緒(ひも)のくれなひは
せめてもの我心なる

明の烏のかう〳〵と
啼ひて行衛は白雲の
空さためなくたちいでゝ
世の志士(まそらを)ともろともに
血汐にはふ義の旗を
あづまの空にひるがひし
自由をしらぬ爲政家(あせひか)の
頭首(かうべ)に劍をくはへんと
ひそかに知己をかたらひて

畵策(かくさく)したる大望も
自由をのろふ酷政(こくせい)の
暴風(あらち)のためにやふられて
われは悲運(ひうん)のそこふかき
高波はもる北海の
やみのなだなる集治監に
浮ふときなく沈みもき
波間をもるゝ月影に
悲鳴をわけてやるせなき
かなしさいやす身となりぬ

時はながるゝ渓流(たにかわ)の
山はた谷をめくることく
くりかへしては流れもく
夏のあつさも汐風に
吹きおくられて虫の音の
秋の哀をうたふなる
調も高くふしさえて
此世なからの地獄とも
知らて調ふるかなしさに

眠もやらぬ板の戸に
落る木の葉のわとしけし
思へはわれは彼の夜はと
天を恨みしことあらす
地をは呪ひしことあらす
神に怒しことあらじ

わしたの露をふみわけて
虫おとろかす外役(がいえき)に
草刈鎌の刃もさとく

かりつくしたる秋野原
おくれさきだち飛鳥の
羽風も遠くなるまゝに
柿色染の雲落て
夕日さひしく照すなり
獄屋に歸る囚人(めしうど)の
荷車につむ青草を
喰ふ牛馬におとりたる
かなしき我のつかれはて
歸りてやすむ檻房(かんぼう)は

せめてもの神の御國なる
たけりくるひる運命(うんめい)に
此世の望たへはてゝ
涙に空をうちなかめ
くるしさ忘るこよひしも
まだくれやらぬ夕月に
先にうけたる郵便の
封切なからよみもけは
ふるさとにある吾妹子の

身は秋の夜のねみなへし
かよはきさかの朝露に
きえぬ其間のかりまくら
八重の汐路をしとねにて
四屋(ひさや)の中のかなしかる
此憂きわれを訪はんとて
年ふるさとを立出て
ちからなき身に陸の奥まで
山はた海を辿りきつ
ある草の屋に宿りしか

落ちもく月に夜はふけて
あらしの音もやみしころ
たちまち發熱はなはたしく
七日を經たるあさまたき
のこしこそして歸らさる
とこよの國に入りにしと
宿の主人の涙もて
かきれくりたる其文を
よみもく我の胸はさけ
とはしり出る瀧津瀬の

涙にうてもわななきて
もちたる文もいつしかに
涙のうみにたゞよひぬ

地

あゝそも我はいかなは
此世の中に產れしそ
天はもたへて泣くわれの
悲鳴の聲をたのしむか
地はにえかへる胸中の
ももる歎をたのしむか

たのしくみたる人生は
吾身をはふる祭壇（こころ）にて
魔王の使は貧、艱み
悲戀、悪徳、不義、失敗、
種々によそはふ其手には
苦痛の劍をひつさげて
弄殺（なぶりころし）になさんとて
焔をふひて立てるを見る

悪にくみせぬ潔ぎよき
われはなんぢにのろはれて
戀も事業もやふられぬ

わゝ陰陽（おんよう）よなにもへに
われを此世にくたせしそ
なんちの人をうみぬるは
よしあし知らぬ運命の
のろひの太刀にもたねつゝ
くるしむわれのさまを見て

たのしまんとのためなるか

聞け。運命のつかひらよ
生死のちまたに狂ひつゝ
のろふてさけぶ吾聲を

あゝ哲學よなれはいま
狂ひくるひて死の蔭の
闇路に迷ふわれをしも
さとりの門にみちびきて

あかるき國のよろこびに
入らしめよとそ叫べども
「眞如」はわれをあさわらひ
「無極」はわれをもてあそび
「絶對」はわれにあけつらひて
さむかせ雪を捲かでと
痩に白刃のむふこと
重荷に堪ぬくるしさに
悲痛は懷疑の手をのべて
やみの荒野にさそひもき

狂はしめつゝ驅廻される
心のうちのくるしさを
知るものとては天地（あめつち）に
なやむ身の外になく
日頃愛せしいましなへ
今はなやめる心根を
いやすまことの道ならて
なはなやませる及なり

あゝ吾友の哲學よ

いましは常のもとなれと
くるしむ時の敵にぞある
たゞちにわれを離れ去れ
去らすは我はとこしえに
魔王を呪ふことをもて
なれをもともに呪はなむ

あゝ天然よあたゝかき
「美」のふところに抱きあけ
悶へもだへてたへやらぬ

心のうちのかなしみに
愛のまことをあらはして
口吻(くちつけ)なしつくるしみを
いやしたまひと祈れとも
自然はわれを容(い)れさるか
われはた自然を容れさるか
てつのしからみ結びたる
四屋(ひとや)の窓にれとのへる
秋風いたく身にしみて
夜の女王のてらします

光もいとゝものすごし

遠くよせては冴かなる
月にうそふく波の音を
もたかにきゝし花の夜も
すゝしくきゝし夏の夜も
いまは昔となりもきて
今宵はいたくもたへれる
わかくるしみをあさわらひ
嘯かこときこもなり

くるひくるひて泣くわれを
いたく狂はすてんねんよ
いましは常のともなれと
悲むときの敵にそある
たゞちに我をはなれ去れ
去らすは我はとこしえに
魔王をのろふ聲をもて
なれをもともに呪はなむ

あゝ慈愛よあたゝかき
なれの心のきよくして
なれの姿のやさしきは
世の憂波にたゞよひて
つかれはてたる我をしも
いくたひとなく救ひにき
もはや世になき吾妹子は
なれのすかたの寫眞にて
闇夜をてらすひかりなる
あれのゝなかの泉なる

いのちなき世の生命なる
愛のまことは神のごと
けたかく匂ふおもさしに
やさしくかたる言の葉に
みとりすゞしき髪の色に
星かと見もるまなさしに
くもかと見もる薄衣(うすぎぬ)に
あもるかごとき振舞に
顯れそめてとことはに
うせじと見たる吾妹子よ

なげきのたねの面影を
こゝろのわくに殘しつゝ
雲かゝすみに身を乘せて
行衞もしれすなりしより
くるしさまさる吾こゝろ
たへていましの莫りせは
こゝろの糸の亂れもき
もだへ〳〵て泣叫ふ
いまの悲痛(ひつう)はあらさらむ

あゝ運命よなれの手に
うはひて去りし吾妹子を
死の世界より呼おこし
生きかへさすはとこしえに
陰府にてなれを呪はなむ

あゝ大事業よいくたひか
名のいさましきなれの身を
姿まはもきなれの身を

もとめて得むとはやりつゝ
雲ふかくしてうみやまの
行手もさたかならさるに
蹈みいたしては蹈みまよひ
つひに進退さはまりて
墳墓のしたにうもれたる
人いくはくか知らさらむ

われ一生をかへり見れは
黄金も、家も、名も、妹子も

「共和」「自由」のためにとて
もちたるものを空ふし
あかなひ得たるは何物ぞ
業また半ならさるに
悲運の鬼にとらひられ
此世の陰府に身はれちて
こゝろをみたす悲痛のみ

あゝ運命よわれの身は
なむちのために倒るゝも

陰府の世界にくだりなは
地下の義人を呼ひおこし
靈の世界にたゝかひて
勝利をなむちと爭はん

人

狂ひくるひて泣きさけひ
悶へもたへて泣きさけふ
薄運の兒をあわれめよ
なむち惠をくたさすは
たちまち心臟はれつせん

天地の主なる父上よ
祈れはことふる父上と
叫べる聲のほからかに
聞えるかたを眺むれは
かゝやくはかりの面貌に
くちさる愛の色みえて
眼にはなみたのみちみてる
なさけにあまる教誨師
昨夜もたへしそれもへに
やむみとなりし我爲に

神にいのりをさゝくなり
祈れはれはやさしくも
われの邊にちかつきて
今ちやう醫師のしらせには
きみの心臟つねならす
一日(ひとひ)をまたてわわれにも
幽冥(ゆうめい)さかひを異にする
悲劇を見るに至らむと
語るを聞きてたへかねつ

救世の大事むなしふして
君先つ地下にくたるかと
思へは胸もさけんとす
しかはあれとも奈何にせん
ことはや爰にいたりては

嗚呼同胞よはらからよ
こゝろしつかに顧みよ
君かいまより倚るべきは
戀愛、天然、大事業

天地、陰陽にあらすして
のぞみなき世の人のため
きよき血汐を流されし
耶蘇（エス）のなさけの泉なる
父なる神の愛の手に
身心ともにまかせつゝ
命を夕にまつにあり

運命（こうむめい）まなこを失ひて
人の正邪をわかたねと

父なる神はとこしえに
正義の人にくみすなり
慰めたまひとねむころに
すゝむる聲のわなゝきて
まことにみつる言の葉に
おもひわまれる其折から
四屋の窓にあさひかけ
照てまはもきそのかけの
導師のおもにてり添へて
神とも見もるけだかさよ

運命まなこを失ひて
人正邪をわかたねと
父なる神はとこしえに
正義の人にくみすとか
此一言をきゝしより
さとりの國のはそみちを
得たるか如きこゝちして
心のなみもれたやかに
胸の鼓動もしづまりて

身のうきこともいつしかに
意味あるものとなりもきて
心もたかになりけるか
日を經るまゝに嬉くも
病はいつかいやされぬ
妙なる神のみめぐみと
讃めたゝふまにそのとしも
いつしか暮となりもきて
あぐれは二三の聖代の春
色まだわかきゝさらきの

紀元節ともなりぬれは
我等か叫ひし革命の
自由のいくぶはかちをえて
大地憲上にあらわれつ
特赦のつもにうるはひて
囚屋のうちをいてにけり
指折みれは七年(なゝとせ)の
なかき歳月(としつき)世をさけて
石をまくらに草のとこ

むすひてとけし白露の
きえてあとなき面影を
心におくの碑にしるし
うつることなき御恵の
神のひかりにてらしつゝ
疲れはてたる足蹈みしめて
むかし訪ひきし陸の奥の
わかなき妹子の亡骸を
とむらひわきし古寺を
又もとはんとめくり來て

唉ひて枯れたる荒野の中の
尾花のかけにたゝすめは
日影もいつかゝくれ行き
秋風いたく身にしみて
野邊の行手をふきとじぬ

五右衞門

晝は光のみちく〳〵て
夜はあさやかの星の影
愛とまことの色見えて

闇夜すくなき天地(あめつち)に
不義と知りつゝ不義をして
浮名を流す人々の
多からむとも思はへす

かしらに虚榮(きやうえい)の玉かさり
口(くち)に不爛(ふらん)の舌ありて
平和を歌ひ。手にはまた
義の彈琴をかきならす
しろく貴き指さきに

ことくにうばふ帝王は
不義なる人と思はすや

眞珠(またま)、白玉(しらたま)、ちりはめし
清涼殿のあさ夕に
黒髪ながき姫君の
指にみだるゝ琴の音
愛にうるたる哀れなる
女(おんな)をころす大臣(おほおみ)は
戀ぬすびとゝ思はすや

賊軍

勝ては官軍負れは賊と
熊笹かざす童の
里の小路を歌ひもく
三々伍々を見よや君

肉の林の血に砕て
翼れさめて眠る鷲
酒の泉のあわき香に

浮れ狸のうまゐをは
驚かしみん攻太鼓
大銃、竹鎗、薤旗
樹て、怪しき世界をぞ
打たひらくる強者は
田舎漢（いなかおとこ）となるときの
彼等ならすや見よや君

内村鑑三

不義を憤りて泣叫ふ

聲あめつちに轟けは
天(てん)に靈火(れいくわ)は燃えあかり
地に洪水のみなきりて
浮世のなかの汚れをは
洗ひつくさむちからこそ
義人の君のいのちかも
一たび筆をくもに曳き
文のはやしに別けいれは
吉野のさくら不二の雪
いろ香やさしき天然(てんねん)を

くちぬ思想(そう)の綾として
高きしらべにうたふなる
詩人の君のけたかさよ

浮世を呪ふそのころは
神にさんびの歌となり
僞善をあさける其筆は
正義をしめる劍となる
その誠意(まこころ)は大神を
やとす黄金の宮居にて

世はくちぬるも朽さらむ

戀の夢

春の野はらをうら〳〵と
吹く春風にれくられて
さすろふ我のいつしかに
ひともと櫻咲きにほふ
花のこ影にやらひぬ
戀のわれをうたふなる

雅歌のひとまきとりいでゝ
讀みもてもけは綠野の
春のにはひにさそはれて
つひまとろみぬ草の上に

香に匂ふらむ花雲の
たなひき染めしかあたより
うすくれなひの羽衣に
身をよそはひつ天津女の
ひら〳〵ひらと顯れて

にはふ羽袖につゝみたる
光もきよきまなたまを
わか懐にのこしたきて
又ひら〳〵とのはりもき
雲隠れにぞなりにけり

のこれる珠はあたゝかき
春風の手にくたかれて
わか胸の中にいりしより

ひやゝかなりし我胸の
あつくなるまゝ眼醒れは

夕暮ちかき花の上に
むつれむつろふ蝶ふたは
何なる夢をたるらむ
一夜の露をしのくべき
宿かることも忘れつゝ

花びら

朝露匂ふ春の野に
さすろふ蝶のもろつはさ
花の色香にそまるまで
うかれうかるゝ樂さよ

たのしくあそふ蝶の身の
翼に花の香をうけて
霞の綾に乘りて行く

はては黃金の雲井かな

笑をたゝへて打仰く
處女心のけたかさは
散りかゝりくる花片の
黑髮にれくさまなれや

又ちりかゝる花片を
袂にうけて眺めやる
心の緒琴亂れけむ

うるみそめたる眠眸（まなざし）や

祝歌

上城河合両兄姉の合歓の喜を祝さん

たもとにむすふ露の玉
とくるいろなき處女子の
うらゝなるこの春の日に
なにもへ秋を忍ぶらむ

とて花と雪とに寄せて讀める

吉野の里の櫻花
うすくれなゐに染めいでゝ
八重の霞にゝほへるは
大和淑女のすかたかも

千代に聳ゆる不二の峯
つもる雲井のしらゆきに
旭の影のまはゆきは

大和君子のすがたかも

高峯の雪のなかりせは
吉野の櫻いろわせん
吉野の櫻なかりせは
高峯の雪やはへさらむ

花と雪とのなかりせは
大和錦もあらさらむ
君子淑女のなかりせは

大和御國もあらさらむ

千歳の雪に八重の花
かたみにそへる愛の香に
天の岩戸をいでたもふ
神はむすふの神なるか

雁か音

草の枕にかりねして

わわれ身にしむ旅衣
戀しさまさるふるさとの
もめぢをかよふ吾魂は
さきだちませし父君や
いとしき母の亡骸を
葬りたりしはかのべを
夜すからめくりわかすらむ

みぢかき春の小夜更けて
寐耳にれへる雁が音に

驚かされて眼さむれは
燈火のかけかすかにも
ありし昔のなきひとの
哀をかたることくなり

琴湖の曙

匂ふ八代重の薄霞
月の光をとじこめて
おほろにふけし春の夜の

牧場〳〵にうちつゞふ
羊(ひつじ)のとこの若草の
みどりのかほり清(きよく)高して
葡萄の酒に醉しこと
手枕にふす飼人の
天津使を夢にみて
羽衣の香をおもひねの
夜は東風のみぞ吹通ふ
薄花染の春の色

つねに砂漠(さばく)のかせすでく
地中海よりたつくもは
あつさに雨を吹きくはへ
ねむりもたかに臥す夜とて
いとまれなるに此頃の
春の心のやさしくも
なさけにみつる暖(あたゝか)き
玉の腕にはるかせを
つげの木櫛とかざしつゝ
自然(しぜん)の床(とこ)にもつれたる

雲と風との亂髪を
すき〳〵よめたる春の色

都は春のちりふかく
ひとの心もうみはて〳〵
むかし榮光（さかえ）とはこりたる
神の宮居の彫刻の
眞珠白玉（しらたま）きらめきて
黄金（こがね）百金かゞやけど
住む神もなき亡骸の

最とはこりかに棟高く
空に聳ゆるエルサレム
八重に霞をおりなせし
曉ちかき朧夜に
いかなる夢をむすふらむ

花の都はれひぬるも
自然（しぜん）はつねに若やきて
神のみむねをあらわせと
浮氣心のたのみなき

人は自然にれとるかも
見よエルサレムに程近き
橄欖山を忍はする
霞に匂ふ雲の色
黛色染に靉きて
傾きそめし月影に
ひとしは色は増れとも
都は夜半の雲深し

都の夢のさめぬまに

牧場のはてに月落て
山の姿もみづうみの
鏡と見もるみづのれも〳〵
霞と霧の綾織の
よるの衣にれはれつ
苫屋をもれる有明の
黄金の色をたゝよはす
漁村(きよそん)の空もれほろにて
あかつきちかき明星の
晝の使をまたんとて

天降(あも)りたまひし如なり

沖に泛(う)けたる漁舟(いさりぶね)
けむりとなりて雲に入る
かゞりも今は消行きて
明方なかき曙の
しの〳〵めつゞる鳥の音に
潮は磯にそゝけども
獲物(えもの)もあらぬ寂しさに
すなどりびとら力(ちから)なく

淺瀬に舟をちかつけて
仰くともなく眺むれば
ひるをてらさん御使の
光はよるをはなれけり

東の空にそめいだす
薄紅のあさやかに
よるの帷(とばり)はきえぬれど
霞に匂ふ曉の
光に浮ふ花雲の

鑓さそめて美の神の
さすろふ國をしのはする
曙色をたゝよはす
カリラヤ海の水清く
玉の緒琴にかたぞりし
造化の御稜かしこみて
万代までも濁らしな

二十四絃の琴糸の
それにはあらて水の面に

寄せては返しかへしては
またも寄せくる漣に
美の御使の羽衣の
羽風のことくはからかに
匂ふ朝風くわゝりて
天津調の氣高くも
心の糸に響きぬる
美の音(おとづれ)をきくからに
豊葦原に在りときく
琵琶湖の空もしのはれぬ

のぼる朝日にいろまさる
花曇なる花雲の
裾よりおこる朝風は
曙染にいろまさる
八代重の空を吹きはらし
ヘルモン山を掩ひたる
花の香に醉ふ薄霞
きえて行衛は白雲の
隱く峯のもるきなく

いと神寂てそひえたち
天津御國の美の神の
逍遙(さそろ)ふ御園と見もるかも

天と地とのけじめさへ
絶へし高峯にたなひける
その白雲のけたかさは
水清くして魚躍る
名に負ふ琴湖の曙を
晝の使に先立て

望まんものと頂に
わもりたまひし美の神の
わくるをまたて白衣(しらきぬ)を
忘れて去りしことくにて
瑞穂の國に在りときく
芙蓉の雪もしのはれぬ

われにもあらて天地(あめつち)の
美の懐にやとりつゝ
花の香を汲む美酒(うまさけ)に

酔る如き心地して
うかれてうたふ詩の巻の
神の聲とそ聞ゆなる
自然にちかき人の子の
笑顔にうかふ漁舟
もらるゝ波もなき磯の
白砂(はくさ)の上によもすから
つかひあかせし魚網を
かはかさむとて廣けれる

後にみもる人影の
凡人ならぬもひして
振り返りけるかなたには
絲色なる垂髪を
風のまに〳〵靡かせつ
レバノン山のそれよりも
高く秀てし額ひぎは
匂ふか如き眼眸に
仁義の光はのめきて
やさしくむすふ口えに

りんたるところはの見えて
神とも見もる人の子の

霞か雲に身を乘せて
神の宮居の寶座より
あもりたまひし如にて
くれなひ匂ふ糸織の
衣に旭の色添へて
ふたつに見もる仁と義の
道を一身にとゝのひし

徳の化身のけたかさよ
かれ一聲を嘯かは
忽ち海もあせぬらむ
愛の涙を流しなは
鬼神も袖を濡すらむ

之を望めはのぞむはと
海原よりも豊にて
思ひはかればはかるはど
蒼空よりも貴しな

曾てひとたび斯神の
玉を轉はす言の葉を
猶太の野にて聞しとき
心の戀の糸に觸れ
忘れかたくもありけるに
今朝仰きみる面影に
一しほ戀は優りつゝ
尚ほ慕はしくなりてけり

春の心は斯神の

姿をかりて見もるらん
神の心は此春の
姿によりて示されん
妙に貴き斯神は
春風のことちかよりて
今より我にきたれかし
其業よりも最貴き
人を漁るものとせん
天の美音を聞かこと
宣給ふ言のうれしさに

身をそ献けて從ひぬ

戀星

空おほろなる花の夜に
醉へるかことき星影の
光は戀のまことかも
色はからかに夜もすから
燃るこゝろのかいやきを
誰そ彼れかため免しけん

狂ふこゝろの春の夜に
靜にはなつ花影の
かほりは戀のまことかも
もかしきまでに夜もすから
生命(いのち)かきりのかんばせを
誰そ彼れかため免しけん

天には群る星となり
地には雲なす花となる

ちからはおなじ天地(あめつち)の
情(なさけ)にみつる美の神の
なかす涙とつく息(いき)の
陸(くが)と雲井にゝほふなる

神はひとりに在せとも
みわざになれる天地の
ともなりかぬるを奈何にせん
哀れはじめに隔てらる
こゝに戀あり生命あり

こゝに死もあり涙あり

夜すがらなやむ花影に
色おほろなる群星（むれほし）の
宿らむとして宿りえす
霞に戀の路たへて
天と地とは狂ふなる
心でゝろを誰れか知る

心の春

神の光はてりそへと
悲哀の風にすさひにし
心の野原いかなれは
あたゝかき春となりにけむ

美くしき神をけかれなき
心の中につゝみたる
〇〇（それ）子の影をやとすとき

世は花園となりにけり

戀のまこと

「深山の春もおひぬれは
のこる霞をなこりにて
都の空にちるはなよ

人げとだへし山かげの
岩間にきなく吾さまの
清水にうつる寂しさを

世の戀人に知らせかし」

「湧ひて流れてすへつひに
世の戀人の口紅の
錦盃(ちよく)にしたゝる眞清水よ

日毎に訪ふて泣くわれの
瀧津涙のしけくして
やつれはてたる此樣を
とはすかたりに告よかし」

「運命（のり）てふ神の御使か
春の名殘の花の香を
つれなくさそふ山風よ

うるを清水にやしなひつ
戀てふ神にさゝげたる
きよき骸におくちりを
ふきれくりてよ彼の人に」

「苦むす岩よとゝろして

彼の世彼れの訪ひきなは
かが死のさまを語りてよ

もぐらのこして輝ける
戀のまことは鍵ける
白雲の上にのぼりもき
常世の國に入りにしと」

蠶

玉襷せし處女等の
摘んであたふる桑の葉を
くろふ蠶もふたなぬか
みなぬかふれは親達の
免したまひし彼の君と
契る妹背のふるまひに
着飾る晴の白絹を
織なす糸を出すらむ

木櫛

ふるとしつきを吾背子の
病の床にみこもりて
愛とまことの両色を
糸織縞に染めなしつ
木櫛にむすふ黒髪の
みとりも塵にうもるまて
返りみもせぬ姿こそ
人目をいとふ幽谷(やうこく)の

櫻になひく八重霞
浮世を畫く風情なるらむ

露滴

闇をはなれて咲く百合の
花の香にあこかれて
雲の宮居をのかれいで
あもりてけりな汝の手に

あわれやさしき此花よ

なれのすかたは朽ぬるも
やとれる神はとこしえに
わか眞情(まこころ)とかよふらむ

われをまもりて夜もすから
かすかにてらす星影よ
明るをまたて夜あらしに
花もろともに散りもかは
戀てふ美くしき神もへに
死せりと告よ世の人に

海原

よせてはかへす荒磯の
波にくたくる月のごと
たまの腕をむすびあひ
うせぬるひとは若干ぞ

浮世の花にあこがれて
狂ふこゝろも朧夜の
岩か根の波とくたかれて

うせにしひとは若干ぞ

雲を隔てしまはろしの
黄金の山を夢にみて
八重の汐路に棹さしつ
おぼるゝひとの數知れず

花は櫻とうたひつゝ
おぞる腕（かひな）に太刀ふりて
海を血汐に染めたりし

人はいづくに迷ふらむ

月にうたひて花に酔ふ
浮世の果はかきりなき
死の海原にちかつきつ
波なき底にしづむらむ

自然

ふりわけ髪の處女子の
笑顔にみつる愛の色
まことにあふる言の葉の
きよきは花の生命(いのち)なる
神のすかたを宿すらむ

かはりもく世の波の上に
うつろふ松の深緑り

かはらぬ色はものゝふの
忠のまことの香に匂ふ
いのちなき世の生命かな

入江の水の濁れるも
知らて浮べる水鳥の
汚れにしまぬこゝろこそ
うきこと知らぬ稚兒の
乳房にねむる姿かな

花に眠りて月に飛ふ
よるの鳥の聲きけは
身を雲水にまかせつゝ
色則是空とうたひもく
比丘の教偈やつたふらむ

轟きわたる雷や
たけり狂ひる雨風に
櫛つられつ浮雲の
上に聳えてもるきなき

山の姿ぞ聖人なる

天をけりもく荒波に
くつかひされし眞帆白帆
千尋の底に沈みゝれは
波うきたゝぬ渡津海
靜に狂ふ義人なる

金鉢山

新潟の知人鈴木翁なる人死ぬわれ之を金鉢

山と云ふ墓地に送りて悼みたる者

春には花の色にいで
秋には月の影に澄む
造化の勢力みちみてる
あめつちの手に導かれ
六十路の坂の頂に
登りきぬれは入相の
鐘の響に夕空の
生命の光うせにけり

世は村雨のしげくしてれやむときなき秋空をはそくてらせし太陽も何に別れをいとひけむ名殘をこめし夕榮はしばし雲間にまたゝきぬ

暮てはれにし望の夜を冴かにてらす月影を

天なる君の褥にて浮世はるかに見たまはゝ

今宵盈ちたる影白き月の光をたのしとて世の人みなは浮るらむ

月の莚の酒の香に背子も妹子も夢に入り笑みたゝかはす家あらむ

月の高さを仰きみて
塵よりいでし身を厭ふ
新歌人のなくてはや

橋の欄干（てすり）に袖振りかけて
片破月の其戀を
月に泣く人なくてはや

共に手に手を取交し

海に入らむとする人も
月に少時はたゝたはん

鐵のしかみ結ひたる
四屋の中の罪人も
月にむかしを悔るらむ

夕と朝とをつなく可き
よるの闇路も明月の
光に晝をしのはする

彼世は聖國ならぬかは

一日をおきて明けぬれは
常盤の緑り女郎花
桔梗刈萱折りそへて
棺を綾に色とりし
死出の旅路の花の香や
水色染の伴衣も
時雨に濡れて朝寒き
魂亡き人の野邊送り

通る棺を路すから
門邊にいで〻見送れる
處女の眼にも涙あり
また花ならぬ蕾にも
雨と風とに袖濡らす
秋の哀をかこてるか

蔑簾垂れたる格子戸を
洩れてきこえし手すさびの

またうらわかき琴のおと
老ひさきなかき黒髪を
弾きみたしたる指先に
「死」よりの文はとらさるか

桓根に朽る枯葛の
うきこと知らぬ天使（エンゼロ）の
心なき手を合させて
「死」をぞ佛と教へつゝ
稚童にねかまする

母はまことの人なるか

わくり來ぬれは秋風に
常世の空は吹きはれて
時雨の雲の影もなく
寄せくる波のくたけては
浮世の岸を琴糸の
かなつりかはす音さよし

松の調と波のねとに

讃美の歌は合されぬ
魂は天國（みくに）と知りつゝも
土に埋れるさま見れは
聲もしとろに絶やらぬ
悲しさ雲とたゝひきて
墨染色の空黒く
金鉢山の涙雨
れやみもわらす降しきる

萬代橋
新潟港頭連々たる白蛇の如きものを見る

暁ちかき夜嵐に
泣きからしたる虫の音も
はそりて行きつ淺茅の
露のしけきに脛濡れて
すゝしさまさる塵の身の
辿り來ぬればはからかに
夜の衣はぬきつれと

かすみと見もる薄霧に
彌彦山(いやひこやま)もうちけむり
ねむれるまゝの姿にて
眼醒めぬのみか舟江津の
みなとによする朝潮(あさしほ)に
光そゝかむ明星も
その面影をかくしつゝ
晝を照さむ御使の
ひかしの空にけたかくも
登るすかたを仰かむと

いましはらくそ待ならむ

むかし希伯來(へふる)の歌人に
惡(あく)魔の使とうたはれし
エデンの園の其蛇の
昔を悔ひてとこしえに
橋なき河に身を架けて
千萬人(ちよろづひと)を恵みつゝ
過越方の罪業を
贖はんとて幾度か

罪の古衣ぬきすてゝ
新衣着たるやちひろの
雲井を仰く白龍と
見もる姿の萬代橋

黄金にあける貴人も
名利にはしる商人も
疲れはてたる乞食も
濁江にすむ歌姫も
浮世をかこつ歌人も

笑顔に泣ける浮女も
學ひに倦みし青年も
廻りつかれし憲兵も

此大川を渡るとき
なれの恵にあづかりて
あした夕邊のうつくしき
情にみてる天然に
胸のくるしみ醫すらむ

あゝ此我も清くして
世の塵たゝぬ汝の上に
少時やすらひ汚れなき
雲を枕に天然の
美の懐に遊はんと
あさまたきにぞ來るなり

祇園

花ともみもる歌姫の
玉づくりなる高樓(たかどの)に

夕邊の星と群りて
うつ小皷の響には
雲井の雷(かみ)もれとろかん
かなつる三味の調には
月の心もくるふらむ
袖ひるかへす手躍は
燭の光を醉すらむ

情死

いつわりおほき世の中に

男の愛に身をさゝげ
親、兄弟もかひりみす
世をも人をもうらまずに
まことの愛のくれなひに
浮名をなかす浮女の
心の奥を誰れかしる

鴨川

はのかに霞む春なれは
光りてらさん戀星も

醉へるかことく見もるかや

川端にたる青柳も
糸よりかけし春風に
もられもられて靡くかや

水の流も夕霞
たなひくなかを一筋に
石にせかれて通るかや

二條の橋のたゝなかに
頻かむりせし小男の
流れ見てたつふかしや

比叡山

都は塵にうもるれど
比叡の山に神ぞすむ
世はいつはりに充れとも
比叡の山はけたかしな

都娘よこゝろして
天津乙女となりたくは
比叡の山をならひかし
浮世の塵にけかれすに
雲に聳もるたつとさを

都男よこゝろして
天津聖人(ひじり)となりたくは
比叡の山をまなべかし
此世の浮沈(ふちん)よそに見て

千代に變らぬたつとさを

清水寺

清水寺の松風を
夏の夕にかよはせて
君とわたしの書を讀む
書齋のうちに招きたや

音羽の瀧

君。からうたを歌ひつゝ

しはし此方にまちたまひ
わらはゝ行きて水團扇
しはし冷さむ音羽の瀧水

白雨

君。傘を持給はすは
わひわひがさにして行かむ
まことにわらぬ事おはさ
世間の人の口の端は
なぞてれそれん神ぞ知る

二人の中の潔白を

螢狩

招かるゝ螢もあるに
蚊遣かな

涼風

河岸にたちたる束髪の
處女の鬢のはつれ髪に
涼しき風の吹きかよふ

柳の影の長椅子に
ロングフエロの詩集讀む
男は彼女を見上げけり

鴨川流れ水涸れて
せかれせかるゝ其音も
あつさにたゆむ思ひかな

泉

夏のあつさを忘るべき

泉は野邊にわきいてぬ

憂世の憂を忘るべき
愛は處女のうちに在り

暗き一夜を照すべき
光は月のものなるぞ

常世に朽ちぬ生命こそ
げに天地の泉なれ

はちす

菅田の里の夕風に
またゝきたりし蚊遣火も
はそくなりもく短夜の
明方ちかき池の面に
うつれる星の影さよく
浮葉の月の影しろし

たちまちみもる白雲の

鏃き初めしかなたより
薄紅の羽衣に
よそほふ露の珠飾り
みとりすゞしき黒髪を
波うつまゝになひかせて
玉ときらめく明星を
香を吐く口にふくみつゝ
その面影はさやかにも
月をみかきしごとくにて
晨の空に顯れつ

はちすの上にわりたもふ
美しき姫のすがたこそ
天津使か美の神か

晝をてらさん御使の
東の空にのぼるとき
姫のすがたは何しかに
浮葉かくれに成りもきて
池のはちすの三つ二つ
そのあとよりそ匂ふなる

惜別

夢とうつゝのさかひ路を
たどる時雨の小夜なかに
去年の古巣をしたひきし
厂の啼音のきこゆるを

明るを待たでもげぶねの
烟のはてに吾友の
花のすかたぞ隱れもく

憂事しげき世の中と

思ひこかれて我ならす
現のなかの枕邊に
又一聲のおとつれて
魂れとろかすかなしさよ

秋の歌

もびわ

望みいたきて春死にし

花の心も秋の來て
いさかへりてぞ實を結ふ

林檎の花のちりしとき
はづかしかりし吾心
今は身れもになりにけり

葡萄の蔓の葉隠れに
とりかわしたる此指輪
昔を今にかたるなり

あゝ君もへにいくたびか
義理となさけに隔てられ
死なむとせしそ苦しかる

なくむし

たまをまろばす虫の音は
塵よりいでし歌人の
ひくき心にまさるてふ
高き調にうたふよな

玉の宮居の月の宴
花の蓙にうちつどふ
きらひやかなる人々の
いかて知るらむ彼れの心を

しづのを

露蹈みかへる賤の男の
かしらに星のきらめきて
今日のつとめを祝すなり

なさけにみてる其妻は
天の使の心もて
門邊に星をかぞへつゝ

暮れまさりもく秋の夜の
野路をいそぐ賤の男の
歸りをまてる姿かも

たきゞ

賤の男の
　ましはかる日を
　おこたりて
もきふりきなは
　いかにとすらむ

しづのめ

さやかなる
　月につかれや

わすれけむ
うたひつゝもく
　野路の賤の女

落葉

禱のうへに座をしめて
祈さゝくる其時に
窓の戸たゝく音するは
天の使の羽音かも

野菊

としはもやかぬ妹の
野菊一枝手折きて
振別け髪をつかねたる
れとなしふりの稚兒髷に
かさしなからに打向ふ
鏡の影のあひらしや

柳の影

夕日はにしに傾きて
名殘をきゝの霜枯れし
山はた野邊に染めいたしぬ

迷ひくらせし夕烏
秋のあわれをかたちつゝ
ねぐらもとめて行果は
夕雲のすそに隱れもく

片山里はしもかれて

秋の眺もうつろひし
日暮寂さなはてみち
居村にかへる處女あり

わくしもこはる黒髪の
吹く秋風にしからみて
夕日をあはく面影に
うつくしき神のやとります

きえなんとして照返す

日影はしばし餘念なき
處女の姿にたもたひし
こからしの音にしつみもくく

もくてもとはき繩手路
夕暮れ深くなりもさて
妬むか花と見まかひし
處女の姿見えわかす

＊　＊　＊　＊　＊

日あしみぢかき初冬の

くれてしはしは薄暗き
よるとなりけるひんかしの
雲くれなひの香に匂ふ

月の光のかゝやきて
おく霜ふかくなりもけは
此世の闇もいつしかに
高峰を越えてきえにけり

夕暮さむく空さえて

處女のすかた霜白く
月の光に身をあひて
辿りて來ぬる氣高さに

繩手もつきて村ちかき
此方にたてる枯柳
そよけは月の影すみて
霜にふすなる草の宿

月の光に天使(みつかひ)と

みえし處女のいつしかに
柳の影にきえもきて
夜は月高くしもしろし

不朽の祝日

冬の御空かすめる天の戸も
登る朝日の影さよく
てらす光の香に匂ひ
あらわれたもふ神々の
きらひやかなる御出立

今日の佳節を御祝の
行幸をれくる樂司
かなづる調はからかに
かすみそめたる薄霧の
雲とはれもく朝はらけ
駒の歩行のしづ〳〵と
芙蓉の峰にれもりたもふ
神の行幸の伴廻り
畏みつゝも見まもりつ
行手を拂ふアブラハム

イサク、ヤコブに大日孁姫（おほひるめ）
國常の尊まて
立烏帽子に直垂や
佩ける黄金の御太刀も
最とかしこくそ見えまつる

御先拂の伴廻り
路をきよめて通りもく
あとにつゝきて行幸ある
君を守護したてまつる

近衛の武士のぬきつれし
くもりなき義（ぎ）の業物（わざもの）は
神寂てこそ見えにけり
なかに童顔鶴髪（どうがんかくはつ）の
御馬前ちかき侍從一騎
いと嚴にさゝけもく
智慧の鏡のあきらかに
てらす律法のくもりなき
生殺與奪の權威もて
陰府と此世をすべ給ふ

君は白馬に跨りつ
白衣の袖ひるかひし
たぐる手綱の唐錦
ふくむ轡のれとたかく
霞の高峯雲の洋
波なき四波にひゞくなり

その御後に見もめるは
審判を御子に委ねたる
父なる神の乗りたもふ

雲をしとねの大御輿
星の玉簾捲きされは
かさす桂の日のかんむり
愛の聖姿見えたもふ
アナ尊とみちすから
仰く孔子の唐衣
慈悲を織なす忍辱の
釋迦か着飾る法の袖
黄色白色いろ〳〵の
人のれもては異なれと

古今東西なしきさは
天(てん)をもととなる人の道
守りて死せる藤樹や
仁齋、ブレトー、ソクラテス
すゝむ御輿の後押(あとおさ)へ
雲の通路はるゝ〳〵と
芙蓉の峰にわれりたもふ

八重になひく白雲の
峰にいはひの神集ひ

天津薤につらさされる
その白衣(はくきぬ)のかゞやきて
うらゝに見もる雲の原
ふりさけ見れは藍染の
空にあらはるかづ〳〵の
女神は鶴にまたがりつ
翳す扇の花撰様
紅ひ匂ふ舞の袖
ひら〳〵ひらと裏返る
かせに色ます朝日影

まばゆき光へたてにて
樂司のかなでたる
玉の小琴のねとたへに
しらべぞあわき天津籟
歌の神達はからかに
うたひなかせる大和歌
樂の調にかよひつゝ
最とい冴かにきこえけり

「天津日の御嗣をすてゝ神の子の

孤兒となりて世の中に
天降りたもふや輝ける
眞珠白珠ちりはめし
帝の舘よそに見つ
いともいふせき草の家の
驢馬の住家を假の宿
槽のなかの夜すからを
悲みたもふ父君の
月の光もあらわさて
けかれねはひつ愛の袖

涙のつゆに濡れし夜も
今は昔のものめなれや
首尾好くサタナに打勝て
天津御國のもとをすえ
凱戦わりし大君の
途出の日をそとしごとに
祝ひ祭るぞ實に慶の
祝ひ祭るぞ實に慶の」
かくはがらかに謠はれぬ

明治卅一年八月二十日印刷
全　年八月廿八日發行

定價　金二十錢

編纂者　育英社
右代表者　河合卯之助
京都市上京區寺町通二條下ル
妙滿寺前町十三番戸

發行所　河合卯之助
京都市下京區清閑寺町二番戸

印刷者　村上愼五郎
京都市上京區三條通東洞院東入
曇華院前ノ町十七番戸

印刷所　合資商報會社
京都市寺町二條下ル

發賣　文港堂書店
東京神田表神保町

發賣　所東京堂書店
東京神田雉子町

發賣　所岡崎屋支店

版權所有

三十一年五月大改正

中等教育 書籍廉價目錄

附新刊圖書及雜誌

郵券二錢送附ノ方ハ無代價進呈ス

弊堂從來學生諸彥ノ御便益ヲ圖リ學校教科書ハ特ニ其價格ヲ低廉ニシテ以テ其御需用ニ應スルヲ主トセリ故ヲ以テ發賣數日ニ月ニ增加ノ榮ヲ來セリ是レ偏ニ大方諸彥カ御愛顧ノ然ラシムル所ニシテ實ニ欣扑啻ナラス候因テ今回其御愛顧ニ酬ヒンガ爲メ一層御便利ヲ擴メ中等教育ニ係ル書籍目錄ヲ編製セリ而シテ其記載セル書籍價格ノ如キハ極メテ低廉ヲ主トシタレバ他書店ノ價格トハ蓋霄壤ノ差アルベシ殊ニ書目ヲ分類列擧シタルヲ以テ搜索一過猶ホ物ヲ囊ニ探ルカ如シ大方ノ諸彥萬望本目錄ニ依テ倍舊ノ御注文ヲ乞

京都寺町通二條下ル

河合文港堂書店